

須坂市日瀧原における出作りと定住化

－明治期以降の動向を中心に－

市川康夫

キーワード：出作り、定住化、須坂市日瀧原、虫送

I 序論

長野県須坂市とその東方に位置する高山村との村境に、虫送という地名が存在する。虫送の周辺にはリンゴを中心とした広大な果樹園が広がっており、その中心付近には60軒ほどからなる集落が形成されている。この集落は、出作りをしていた周辺村落の農家が、明治中期頃から母村より移住し始めたのをきっかけに形成されたものである。

出作りに関する既存研究としては、白山山麓における焼畑耕作を中心とした研究が代表的なものとして挙げられる（田中・幸田1927、藤田1981、山口1994など）。白山山麓では、居住する母村から季節的に山間部に移動し、山地斜面に常畑を拓き、その周辺に焼畑用地の雑木林と、その中に点在する桑園、採草地、栗林などを利用する耕作が行われていた（山口1994）。藤田（1981）によると、近世の石高制において焼畑が小額の年貢であったことから、食糧自給の補助を目的として農家が他所へ出作りに出ることは山村地域において特によくみられた現象であった。しかし、出作りがそのまま集落形成へと至る事例は少なかった。

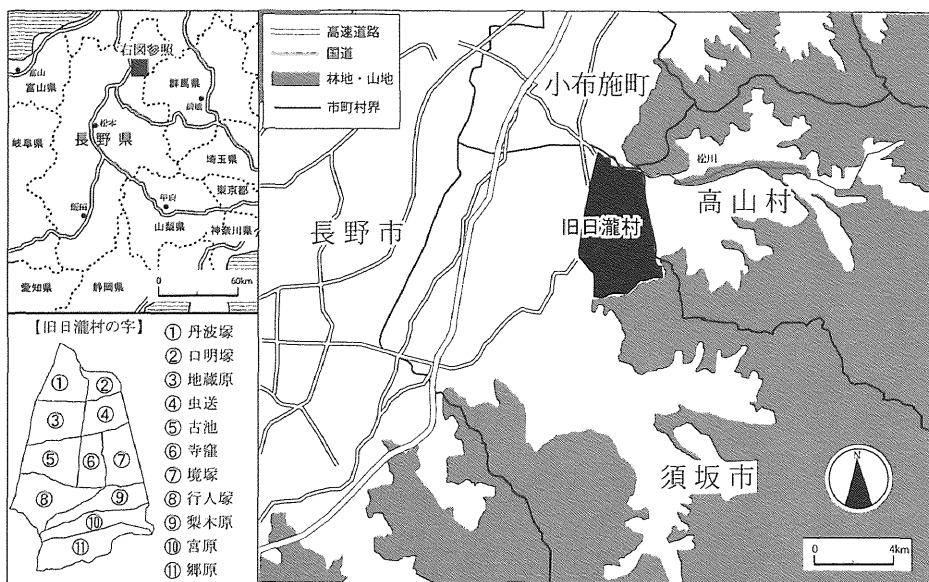
その他、出作りに関する研究としては、昭和初期の東北地方の山間部における出作りとその生業に関する研究（田中・山口1936）や、近代の八重山諸島における遠距離通耕とその社会的背景に関する研究（藤井2010）、1960～1970年代の柑橘栽培農家による出作りに関する研究がある（規工川

1964、豊田1972）。

以上のような既存の研究における出作りととの比較において、本事例は三つの特徴をもっている。それらは、①本事例の出作りが特定の村から特定の場所への出作りではなく、複数の周辺村落の出作りによって耕作されていたこと、②次に山村における出作りの多くが、水平的移動において標高の高い場所へと移動するのに対し、本事例では標高の高い村から低い場所へと移動する出作りが中心であったこと、③そして周辺村落による出作りがそのまま集落形成へと至ったことである。

本研究の対象とする地域は、現在の大字日滝に相当する（第1図）。この範囲は、1936（昭和11）年の須坂町との合併までは日瀧村であった。日瀧村は、1873（明治6）年に日瀧村（後の本郷）、大谷村、高橋村、相森村が合併してできた村であり、11の字に分かれていた。

日瀧村は、松川扇状地の扇央に位置し、北は松川、南は明覚山によって区切られ、東の高井村とは南北に延びる直線の道路を境界としている。日瀧村が位置する扇状地の扇央部は、東西約4.5km、南北約2.5kmにわたる約760haの範囲にわたっており、これらは「日瀧原」、「ハラ」、「ヒタキッバラ」、「シモッバラ」などと呼ばれていた。扇状地の扇央に位置する日瀧原には、河川の流路がないうえ地下水位が極めて低く、その開発には多大な労力を要した。特に、宮原や郷原の近辺を除く場所では、いずれも扇側を流れる八木沢川の水源を



第1図 研究対象地域

利用することが困難であった。また、日瀧原の北端を流れる松川も河床が低く鉍毒水であることから、生活用水の確保が大きな課題であった。日瀧原の開発は近世初期から始められ、日瀧原の中央部の虫送に人間が定住し始めるのは明治中期からである。

本研究では、明治期以降の日瀧原における出作りの展開とその特質、および虫送の集落形成における定住化過程の一端について明らかにしたい。

Ⅱ 日瀧原における出作りの展開

日瀧原は地元村である日瀧村ではなく、周辺村落からの出作りを中心に開発が行われてきた。本章では、過去の文献から近世期の出作りについて概観し、次に近代期の出作りの具体的な展開について明らかにする。

Ⅱ-1 近世期の出作り

開発前の松川扇状地は雑木林と野草地であり、扇中央に位置する日瀧村の地先にある林地は日瀧原

とよばれていた。菊地（1986）によると、扇状地の扇中央部は周辺23ヵ村の入会地として燃料・刈藪の採取地であり、扇中央の畑作地である日瀧原は日瀧村、高井野村、牧村の村受新田であった。したがって、日瀧原の開発権は日瀧村とその周辺23ヵ村が持っていた。日瀧原は水利の便の悪さから開発が遅れていたが、1629（寛永6）年に山田村、高井村、六川村の開発人が須坂藩に許可を受けたことを契機に本格的な開発が始まった。

近世の日瀧原の開発に関しては、原（1986）に詳しく述べられている。原（1986）によると、日瀧原の開発人である入作新田の肝煎は、1707（宝永4）年の時点で駒場村に3人、中山田村に2人、高井野村に2人、六川村に1人であった。これら6人は、日瀧原の入作新田の組頭となり、まず自分に近い血縁・地縁の百姓を募って開墾を始めた。入作者の居村は現在の高山村と小布施町の全域に渡っており、総勢500人以上によって開発された。日瀧原はこれら6人の組頭によって耕作される6つの新田の連合体のようなもので、藩に直接年貢を納めるなど、一つの独立村としての性格を有していた。しかし、地元村である日瀧村にとっ

て、自分達が刈敷や薪などの採取権利を持つ日瀧原を他村の住人によって開発されることは心外であり、宝暦年間（1751～1763年）に日瀧村から須坂藩へ「御上様御威光_ヲ以_テ当村へ引取_リ」り、日瀧村で日瀧原を管理するように願い出た。開発の経緯を知らない藩役人はこの申し出を一旦承認したが、事実を知って驚いた入作組頭らが藩役人を説得し、これまで通り「一村同様_ニ致_シ」直納万事別_ニ而右之通名主役可相勤」と命ぜられた（原1986）。

菊池（1986）によると、地元村である日瀧村は近世前期までは日瀧原の開発に参加したが、中期以降には参加がわずかとなった。近世中期から後期にかけての出作り村に関しては、それまで中心であった中山田村が日瀧原入作から後退し、代わりに奥山田村と牧村における入作が増加していった（原1986）。

これら日瀧原における6人の組頭による開発は彼らの子孫によって代々受け継がれたが、地租改正を推し進める明治政府の政策により、入作組頭の嘆願が通じないまま日瀧村と合併し、その開発権利は解消されることとなった。

Ⅱ－2 近代期の出作り

1) 隣接村落による日瀧原への出作り

近代期の出作りに関する資料の中で、村を単位とした体系的な数値があるのは高井村である。日瀧村の東に隣接する高井村は、1876（明治9）年の黒部村と高井野村の合併によって誕生し、1956年に山田村と合併して高山村となるまで存在していた。

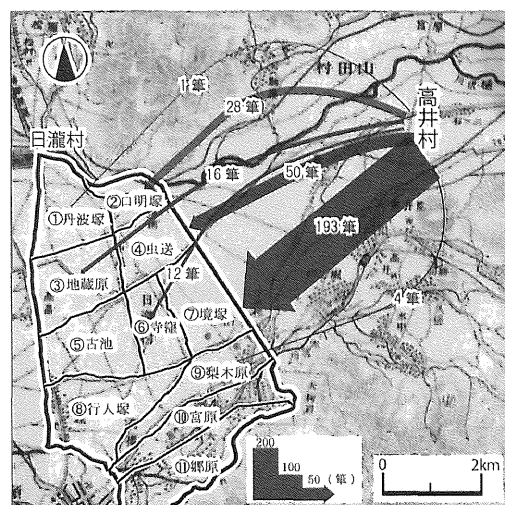
高井村における明治初期の日瀧原への出作りについては、1876（明治9）年の「高井入作字分帳」および「高井入作名寄帳」によってその傾向を把握することが出来る（第1表、第2図）。高井村から日瀧村へ出作りに出ていた字は、計11ある字の中でも7つであり、それらは丹波塚、口明塚、地蔵原、虫送、寺窪、境塚、梨木原である。これらは丹波塚と地蔵原を除きいずれも高井村と境界を接している字であり、高井村においては居住村

第1表 1876（明治9）年における高井村の出作り地での畑地面積および収穫量

字名	畑面積				収穫大豆				地価金	
	町	反	畝	歩	石	斗	升	合	円	銭
丹波塚			3	18		1	2	5	3	37
口明塚	1	1	3	20	1	8	5	6	50	4
地蔵原	1	5	5	22	3	1	19	9	86	29
虫送	2	8	3	13	4	1	1	7	101	8
寺窪		7	9	9	1	4	8		39	93
境塚	19	4	8	15	38	6	3	1	1042	14
梨木原		6	9	12	4	6	4		115	23
合計	27	7	3	7	55	1	6	5	1488	99

注）地価金は畑の合計地価を示す

（大谷区所蔵「高井入作字分帳」より作成）



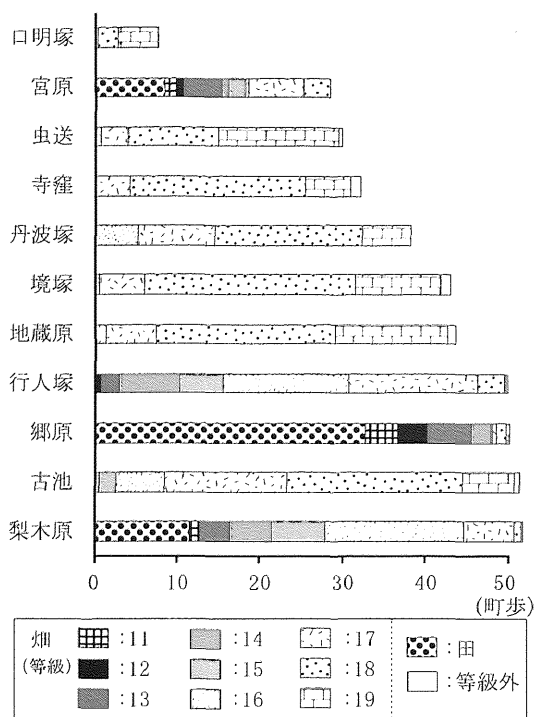
第2図 1876（明治9）年高井村における日瀧村への出作り筆数

注）ベースマップには大正初期作成の「大日本帝国信濃國上高井郡全圖」を用いた

（日瀧史跡保存会所蔵「高井入作名寄帳」より作成）

からの近接性が出作りにおいて重視されたと考えられる。特に、居住地が分布する千本松や堀之内などに近接する境塚への出作り筆数は、計304筆のうち63%にあたる193筆に及んでおり、面積も出作り地全体の70.2%を占めている。境塚に続いては、境塚の北に位置する虫送、口明塚の順に筆数が多くなっている。

日瀧原の田畑について、字・等級別に整理したのが第3図²⁾である。水田を有している字は、扇側を流れる八木沢川の水源を利用可能な郷原と



第3図 1876（明治9）年日瀧原における等級別
耕地面積

注）口明塚、地蔵原、境塚、古池、行人塚は11～19等
級とみなして標記した

（大谷区所蔵「耕地字罫地價之取調簿」より作成）

宮原、梨木原であり、それ以外の字では水田が存在しない。畑に関しては、高橋や相森に近い行人塚、あるいは本郷に近い郷原、宮原、梨木原など、日瀧村の居住地近辺において比較的等級の良い畑が多い。その他、日瀧原の居住地から北に離れた字では等級が低い傾向にあり、中には条件が悪く等級に属することが出来ない類外地と呼ばれる等級外の耕地を持つ字も存在する。特に、虫送や丹波塚においては16等級以上の畑のみしか存在せず、日瀧原の中でも耕作条件の悪い場所であったことがわかる。

日瀧原に隣接する高井村の出作り地は、いずれも低い等級の畑が多い字で展開し、日瀧村の居住地に近い比較的等級の高い字は、日瀧原の住民によって耕作されていたことが考えられる。

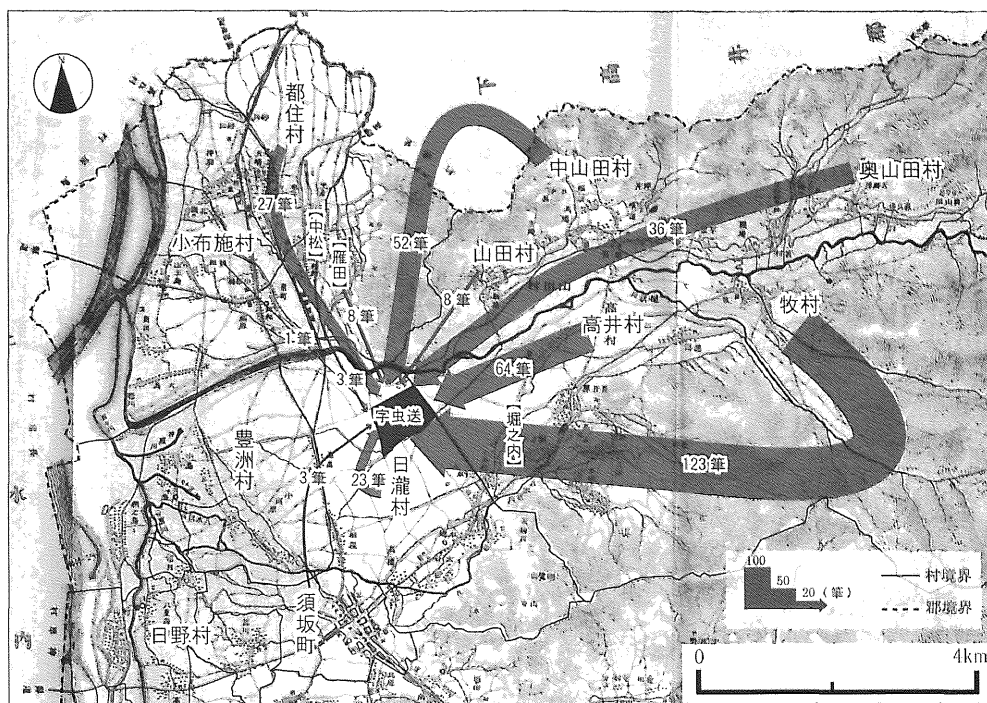
2) 周辺村落による虫送地籍への出作り

次に、日瀧原の中で出作りが定住化へと至った虫送における出作りの特徴をみる。虫送における周辺村落の出作りは、1筆ごとに畦畔と石積み（ヤックラ）の面積と耕作者を記した1883（明治16）年の「畦畔野調帳」からその傾向を伺うことが出来る。日瀧原では、表土が薄く、下層が礫土であることから石が多く、耕作地に占める石積みとその畦畔の割合が大きかったことからこのような資料が作られたと考えられる。字虫送における総畦畔面積は約0.55町歩、石積みの面積が約1.488町歩であり、合計すると2町歩近くに及ぶ。

虫送における周辺村落による出作りを、筆数によって図化したのが第4図である。虫送への出作りが最も多い村は牧村の123筆であり、全体の約35%を占めている。その次に、高井村の64筆、中山田村の52筆、奥山田村の36筆が続いている。その他は、北に隣接する都住村などからも出作りが見られるが、大半は東の扇頂および扇側の村からであり、西側に位置する須坂町や豊洲村、日野村、北側の小布施村からの出作りはごく少数である。これら東に位置する出作りの送り出し村から日瀧原までは、牧村と中山田村からはおよそ6km、奥山田村にいたってはおよそ8kmの距離があり、徒歩にするとかなりの時間を要したと考えられる。

これら周辺村落における1888（明治21）年の人口数と土地面積（第2表）を見てみると、出作り地の地籍に位置する日瀧村よりも、東の村々においていずれも1人当たりの田畑面積が少なくなっている。特に1人当たりの面積は奥山田村と牧村において少なく、6～8kmの距離にありながらも出作り耕作が生活において必要であったことがわかる。これは、こうした耕地面積の少ない村が立地するのは、扇頂の土地が狭小な山間部であり、畑作によって穀物を確保するには標高の低い扇央まで耕作に出る必要があったためである。

これら虫送に出作りをしていた村々に関して、1筆ごとにその分布を図化したのが第5図である。耕地全体に渡って畦畔と石積みが分布してお



第4図 1883（明治16）年の周辺村落による虫送への出作り筆数

注）ベースマップには大正初期作成の「大日本帝国信濃國上高井郡全図」を用いた

（明治16年「畦畔野調帳」より作成）

第2表 1888（明治21）年における日瀧原周辺村落の人口数と土地面積

村名	人口（人）		土地面積(町)					1人当たりの 田畑面積 (町)
	戸数	総人口	田	畑	宅地	山林	原野	
中山村	265	1242	32	167	16	446		0.16
奥山田村	203	898	24	62	10	255	42	0.09
高井村	558	2461	110	425	37	534	185	0.21
牧村	159	772	26	63	10	396	2978	0.11
日瀧村	292	1365	54	393	19	170	20	0.33

注）1人あたりの田畑面積は人口と土地面積から算出した

（『長野県史 近代資料編別巻統計（一）』より作成）

り、耕地の中にも石積みが作られている。1筆ごとの大きさは南側で大きく、直線的な筆の形をしており、北側や西側にいくほど耕地は小さく、不整形になる傾向がある。

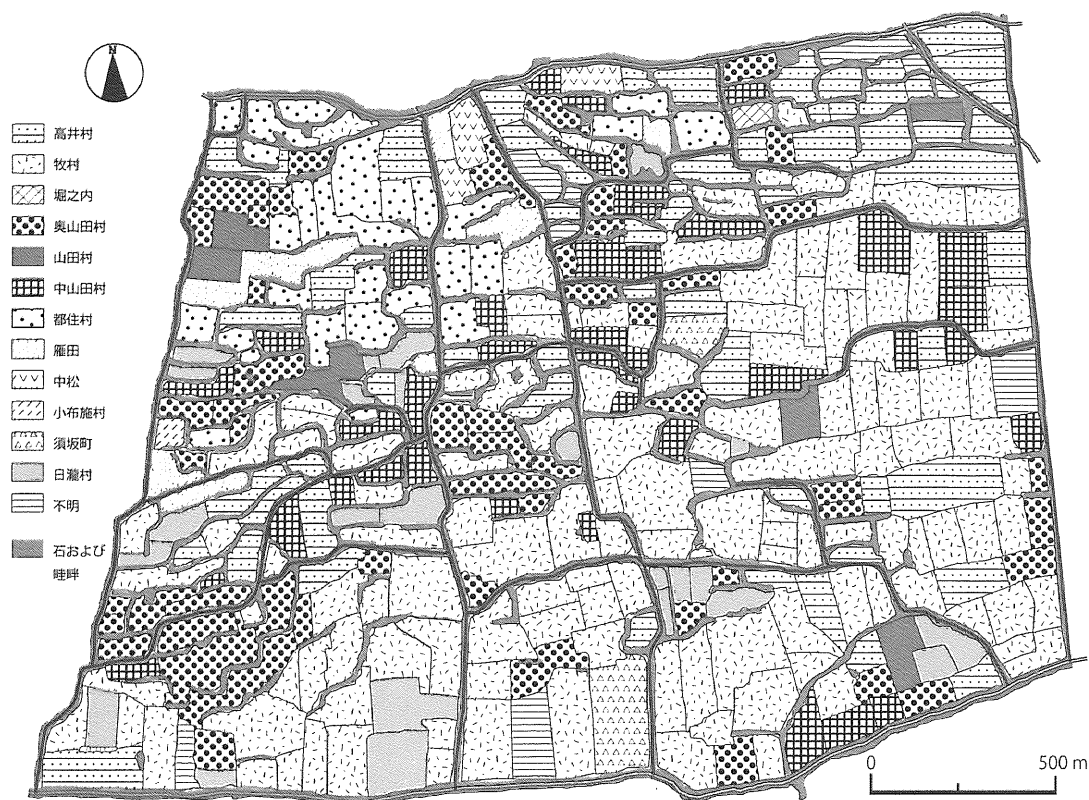
最も多く出作りをしている牧村の耕地は、居村

に比較的近い東側に多くまとまって分布している。また日瀧原と隣接する高井村に関しても、居村に近い虫送の東側の耕地に分布する傾向があり、特に虫送の北東に耕地が集中している。一方、虫送の北側の耕地には都住村や雁田、中松など松川を挟んだ北側の村からの出作りがみられ、居住村の位置と出作り耕地との近接性が関連していることがわかる。

一方で中山田村・奥山田村などの遠方に位置する村々の出作り耕地はいずれも分散しており、居村に近い東側よりもむしろ中央から西側にかけての小区画で不整形な圃場に多く分布している。圃場の形が直線的ではない耕地には、石積みや畦畔が多く、石の多い耕作に比較的不向きな土地を扇頂部の村々の人々が管理していたことがわかる。

3）「農業日誌」にみる日瀧原における出作り

明治期における出作りは、奥山田村荻久保に居



第5図 1883（明治16）年における虫送への周辺村落による出作り地の分布

注）ベースマップには1889（明治22）年作成の「日龍原全図」を用いた

注）凡例において町村名のないものは字もしくは地域名称を指す

（明治16年「畦畔野調帳」より作成）

住していた宮川順作の「家業日誌」から、その様子を伺うことが出来る。日誌が付け始められた1906（明治39）年10月4日から1907（明治40）年10月3日までの一年分について、日龍原での出作り作業をまとめたのが第3表である。栽培されていたのは、主に小麦、大麦、粟、大豆、桑である。10月は主に麦の播種がされ、11月には粟の採取、5月下旬には大豆の播種、7月には大麦・小麦の採取、粟の播種が行われている。一方、冬季の12月から3月にかけては、出作りに出ていない様子がわかる。これら明治後期における出作りでは、雑穀や大麦・小麦、商品作物の桑などが複合的に栽培されていた。

第3表 奥山田村荻久保居住者の日龍原での出作り作業（明治39年10月4日～明治40年10月3日）

日付	作業	日付	作業
10月4日	麦蒔き	7月6日	大麦採
13日	麦蒔き	7日	小麦採
16日	大麦播	13日	粟蒔き
20日	大麦播、大豆採り	18日	粟蒔き、小麦採り
11月8日	粟採り	19日	小麦採り
11日	粟採り	21日	豆ノサク切
12日	粟採り	8月10日	北ノ畑粟サク切
18日	粟採り	20日	—
4月17日	桑植	22日	—
22日	—		
5月9日	—		
29日	豆蒔き		

—：作業内容不明

（宮川家文書「家業日誌」より作成）

Ⅲ 日瀧原虫送における定住化の過程

日瀧原中央部の虫送における人々の定住化は、奥山田村の萩久保に居住していた宮川善兵衛が、出作り耕作から定住したのが最初であるといわれており、虫送にある「宮川善兵衛翁碑」の碑文には、「天保拾貳年壹月六日誕生 明治貳壹年五月當地移住之發端ヲ開キ爾來専心農蚕業ヲ榮ミ」とある。明治初期から須坂において製糸業が盛んになり、桑の栽培需要が高まったことで、日瀧原の出作り耕地においても桑栽培が導入され始めた。養蚕においては、新鮮な桑を蚕に毎日与える必要があり、大麦・小麦栽培や雑穀栽培と異なり日常的に出作り地に通う必要性が生じたことが定住化への動機の一つになったと考えられる。また、上高井郡で明治末期から普及した条桑育³⁾の導入により、運搬する桑の重量が大きく増加し、遠距離からの出作りが困難化したことも移住の理由として考えられる。

宮川善兵衛翁碑が建碑除幕された1929(昭和4)年11月に読まれた「喜びの辞」によれば、「…豆腐屋へ三里酒やへ二里と云ふ淋しき原林に居を構ひ、熱心なる翁が努力を以て芝切りの鍬を第一番に振られたり…(中略)…一農夫たる翁が一挺の鍬を擔ぎ或は新川の水利権のままならぬに袖を絞り人に罵られ或は嘲られ、粟飯に腹をふくらし麦湯に咽をうるをし荊を伐り拂ひ石ころを片付け井戸を自ら掘り、土地の発展に子孫の繁榮に力を盡されたるは言葉につくしがたし…」とあり、当時の日瀧原虫送における開墾作業と定住化がいかに困難を伴っていたかを伺い知ることができる。

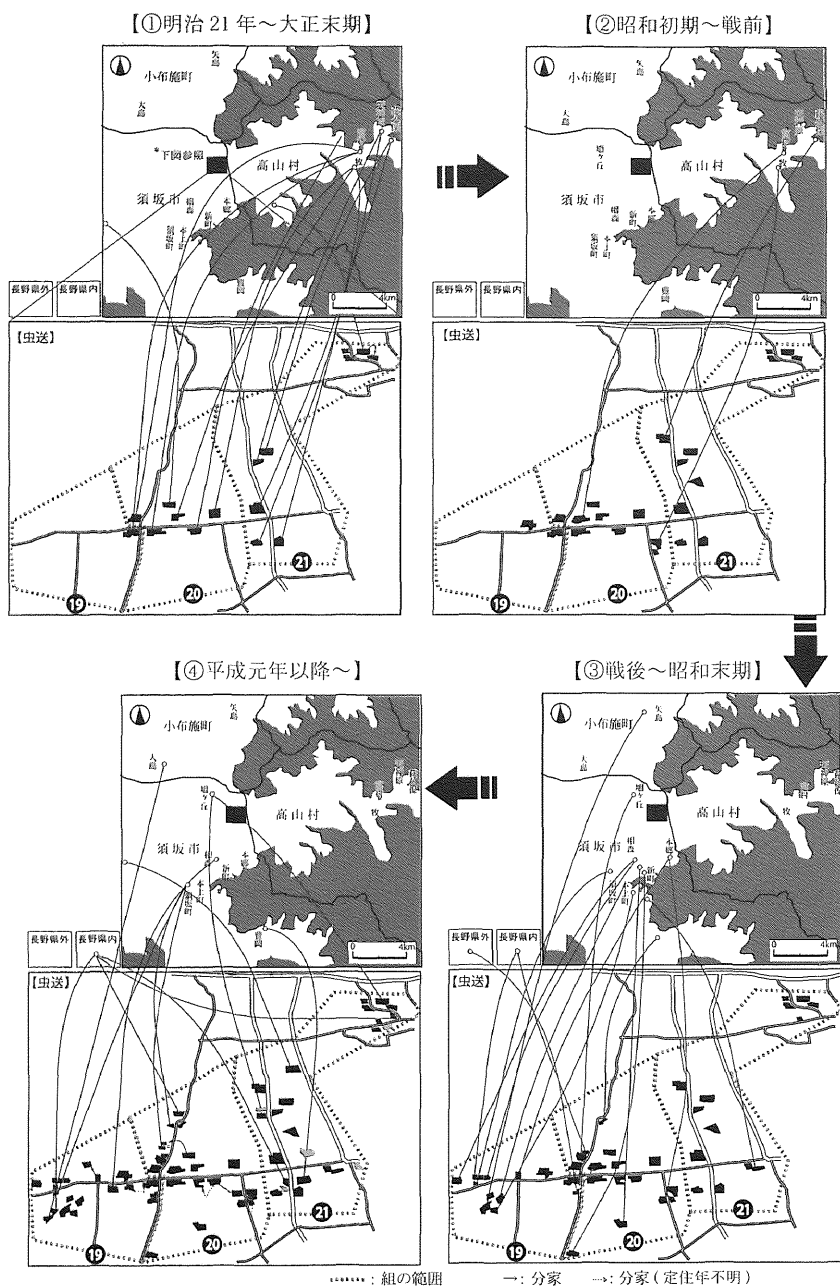
その後、1888(明治21)年から現在にかけて定住化が徐々に進み、虫送は63軒ほどが居住する集落となった。現在、虫送の地名は看板やバス停、信号標識に残るのみであるが、その範囲に相当するのは須坂市大字日瀧本郷町の19～21組である。これら松川扇状地乾燥地帯に形成された集落の定住化過程を、1888(明治21)年から現在まで四期に分けて、前住地と共に表したものが第6図である⁴⁾。

明治～大正期までの移住は、奥山田村の萩久保や天神原、あるいは宮村や牧など遠方の村からの定住者が多い。扇頂に位置するこれらの村では耕地が少ないことから、農家の二男や三男が分家する際に土地の細分化が起きる可能性があるため、他所への移住が必要になったことが考えられる。これら明治～大正期の居住地は大きく2か所に分かれ、北の松川近くと現在の日瀧原産業団地の西側の周辺であり、現在の19組のある周辺にはまだ家屋はほとんど存在しなかった。

昭和初期から第二次世界大戦前においては、移住者の数は少なくなるが、いずれも奥山田村など現在の高山村方面からの定住者であり、隣接する須坂方面や小布施町からの定住者は無い。昭和初期における日瀧原の土地利用は、1929(昭和4)年の農林省の属地統計によると日瀧村の全畑地の92%にあたる323町歩が桑園となっていた(市川1954)。しかし、昭和恐慌以降に須坂にて製糸業が急速に衰退したことによって、桑園を中心としていた土地利用は、リンゴ栽培の導入とともに果樹園化が除々に進展し、出作りは次第に減少していった。日瀧原に畑地灌漑が実現するのは1971年であり、それまでは天水タンクによる灌漑などによってリンゴ栽培が行われていた。

第二次世界大戦後になると、本郷や相森など旧日瀧村からの移住や、須坂市の中心部の本上町や穀町、あるいは新町など須坂市街地内からの移住が大きく増加する。居住地は、今まで中心であった本郷20～21組の周辺から西側の19組が中心となる。須坂市内の移住が見られるようになった一方で、それまで中心であった高山村方面からの移住が無くなり、小布施町やその他長野県内の市町村、あるいは長野県外からなど、移住者の広域化がみられるようになった。こうした傾向は、日瀧原における1959年の水道敷設と、1966年から1971年にかけての日瀧原の畑作灌漑事業が関連していると思われる。

日瀧村における水道敷設は、1936(昭和11)年の須坂町との合併の際の合併条件のひとつであり(①道路の敷設、②日瀧小学校改築、③水道敷設)；



第 6 図 1888（明治 21）年以降における旧日瀧村字虫送への定住化

注）線の無いものは前住地不明。前住地と時代が不明なものは④に灰色で表現した。

（宮川善兵衛翁碑，区有文書，および聞き取り調査より作成）

合併から 23 年を経てようやく実現した水道敷設工事は、移住者増加の一契機となったと考えられる。また、日瀧原における畑作灌漑事業は、リングやモモ、ブドウを中心とした果樹経営の発展を大き

く進め、小林（1985）によると、虫送の 1980 年における果樹園面積は農地全体の 93% であった。こうした果樹園芸地帯としての発展は、高山村方面からの出作り衰退の大きな一因となり、代わって

耕作者は虫送を中心に高畑、小布施町などの農家が占めるようになった。

1989年以降になると、須坂市外からの移住に加え豊岡や旭ヶ丘、村山など須坂市中心部以外からの移住者がみられるようになる。平成以降の虫送における大きな出来事として、1995年の日滝原産業団地の建設が挙げられる。虫送での聞き取りによると、建設が着工した当時の建設用地の土地所有者は小布施町の住人が多く、虫送での土地所有者は3軒程度であったという。明治中期に牧村や中山田村が中心であった虫送東部の農地は、土地所有者によって多くが売却されていたことがわかる。

日瀧原では明治初期からの須坂における製糸業の発展によって、大麦・小麦や雑穀の出作りに加え桑の作付が出現したことで、出作り地における定住化がみられるようになった。しかし、昭和恐慌以降の須坂における製糸業の衰退とともに桑の作付は減少し、リング栽培の導入を契機に果樹園へと徐々に土地利用が転換し始めた。特に、1971年の灌漑事業完了は果樹栽培を盛んにし、出作り衰退の大きな一因となった。虫送における土地所有者は、高山村方面から須坂市や小布施町などへと移行し、定住者の前住地も扇頂部の村々から、日瀧原により近い須坂市街地内やその周辺へと変化していった。

IV 結論

本稿では、近世初期に始まった出作りによる日瀧原開発について、主に明治期の土地統計からその展開と特質を明らかにし、松川扇状地扇央部に形成された集落の定住化過程について明らかにしてきた。近世中期から明治初期までの日瀧原は、6人の入作組頭を中心とした周辺村落からの出作り開発村として、一つの独立した村としての性格

を有してきた。扇側に位置する日瀧村は、八木沢川の水を利用して居住地の周辺に水田を有していることから、日瀧原においては馬草や刈敷を採る程度であり、積極的な開発は行わなかった。そして、近代における出作りは、隣接する豊洲村や須坂町などからの開発は少なく、中山田村、牧村、奥山田村、高井村などの扇頂の標高の高い村からの開発が大半であった。その出作りにおける耕作地は、主に居村に近接した耕地で行われる傾向にあった。しかし、周辺村落の中でも遠方に位置する村では出作り耕地が分散しており、さらに石積みや畦畔の多い筆を耕作しており、比較的耕作に不向きな場所へと出作りをしていた。また、日瀧原の中でも字ごとには等級に差異がみられ、出作りをする村の割合も字ごとで大きく異なっていた。

虫送への定住化は、須坂の製糸業の発展に伴う商品経済化により、麦や雑穀栽培に加え桑栽培が導入され周年的な作業が必要となり、1888（明治21）年の宮川善兵衛の定住をきっかけに、耕地が狭小な扇頂の村々から多くの定住者が現れるようになった。これらの村では、人口圧や耕地の不足に加え、明治末期に普及した条桑育によって、出作りによる桑栽培が重労働となったことも定住化に至った理由として考えられる。その後、第二次世界大戦後になると、扇頂からの移住者はいなくなり、須坂市内からの定住が目立つようになる。そして虫送への定住は、時代が進むにつれて次第に広域化し、県内の北信地域へと住民の前住地が広がった。

以上、本稿では明治期以降の出作りの展開を、出作り先である日瀧原を中心に検討してきた。出作りを送り出す村において、出作りが世帯の生業においていかなる意味を持っていたのかに関しては、今後の課題としたい。

本研究の現地調査に際して、須坂市教育委員会市誌編さん主任専門員の青木廣安先生、原滋様、本郷19～21組の皆さま、日瀧史跡保存会の中村幹郎様、高山村役場総務課の宮川裕明様、奥山田の荻久保、天神原、宮関、蔵平の区長や住民の方々には多大なるご協力を受け賜りました。また、本報告書を作成にするにあたって、手塚章先生をはじめとする筑波大学生命環境科学研究科の先生方から多大なるご指導を受け賜りました。末筆ながら、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

なお、本研究には平成22年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費：課題番号22・291）の一部を使用した。

〔注〕

- 1) 本稿では、空間的な範囲を表現する場合に「日瀧原」を用い、村を表現する際には「日瀧村」を用いる。
- 2) この資料では、等級が1桁のものと、2桁のものが混在して記録されているが、同年度に作成された「高井入作名寄帳」をみると、等級が1桁である筆が2桁に修正されており、いくつかの字では何らかの理由で等級の修正がされていないと思われる。
- 3) 条桑養とは、桑を枝についたまま刈取り、蚕に与える方法で、従来の桑葉を刻んで与える方法よりもはるかに労働生産性が高い飼育法である。上高井郡では高甫村が明治30年代に初めて導入した。
- 4) 聞き取り調査によるデータは、明治期から居住を構える本郷町20組のA氏と21組のB氏である。

〔文 献〕

- 市川健夫（1954）：善光寺平松川扇状地における土地利用－扇状地の地誌的研究。信濃6（5），283～291。
- 上高井誌編纂会（1960）：『上高井誌 社会編』上高井教育会。
- 菊地利夫（1986）：『続・新田開発 事例編』古今書院。
- 規工川宏輔（1964）：熊本県小岱山々麓における出作りによるみかん栽培。人文地理16（6），37～53。
- 小林秀世（1985）：長野県松川扇状地における土地利用と農業経営。新地理33（3），10～24。
- 高山村誌編纂委員会（2005）：『高山村誌 歴史編』高山村誌刊行会。
- 田中啓爾・幸田清喜（1927）：白山山麓に於ける出作地帯（一）。地理学評論3，281～298。
- 田中啓爾・幸田清喜（1927）：白山山麓に於ける出作地帯（二）。地理学評論3，382～396。
- 田中館秀三・山口彌一郎（1936）：東北地方に於ける出作及び出稼聚落の経済地理 福島縣南會津郡檜枝岐村の出作 岩手縣二戸郡田山村の出稼。地理学評論12，218～246。
- 豊田春勇（1972）：静岡県におけるみかん出作り。駒沢地理8，107～117。
- 原 滋（1986）：日瀧原の開発－日瀧原入り作新田小史。須高，23，39～48。
- 藤井紘司（2010）：近代八重山諸島における遠距離通耕の歴史的展開－1890～1970年代における西表島東北部を事例として。地理学評論83（1），1～20。
- 藤田佳久（1981）：『日本の山村』地人書房。
- 山口隆久（1994）：『白山麓・出作りの研究－牛首村民の行方』桂書房。